

『空間・社会・地理思想』発刊の頃

中島 弘二*

Koji NAKASHIMA

Around the Time of Beginning Space, Society and Geographical Thought

私が地理思想科研や社会地理学科研の研究会に参加するようになったのがいつ頃からだっただのか、今となってはもはや記憶が曖昧となってしまった。社会地理学の研究会に参加させていただいたのは、手元の記録によれば1991年7月の下諏訪町での研究会からだったようで、その後2回ほど研究会で発表させていただいた。当時は日本地理学会や人文地理学会の大会と抱き合わせで社会地理学の研究会が開催されることが多く、学会の前後に近くの町で合宿研究会をおこなっていた。当時富山大学におられた水内先生のご尽力で、毎回何人かの院生や学部生が参加していたように記憶している。ただ、私自身の関心で言えば、当時の私は広い意味での人間—環境関係研究および文化地理学をテーマとしており、必ずしも「社会地理学」という括りにはあてはまらなかったが、そんな私も社会地理学の研究会に参加させていただいたことは幸運であった。そうした経緯もあって、1996年に刊行された『社会・空間研究の地平—人文地理学のネオ古典を読む』（日本地理学会「空間と社会」研究グループ編）では、英国の文化地理学者デニス・コスグローブの論考を翻訳させていただいた。

一方、地理思想科研の方は九州大学の野澤先生が研究代表者をされていた頃から、同じ大学の学生として身近に見てはいたが、自ら参加することはなかった。地理思想科研に研究者として初めて参加させていただいたのはたぶん野澤先生が研究代表者を務められていた科研費総合研究(A)「社会理論と地理学」(1993～1995年)からだったように思う。この科研研究会で初めて竹内啓一先生や山野正彦先生、久武哲也先生など、論文だけは何度も拝読させていただいていた先生方と実際にお会いする機会を得ることができた。しかし一番驚いたのは、これらの先生方がいずれも恐ろしいほどの酒豪で、研究会の後はいつも午前3時頃まで杯を傾けながら激論を交わされていたことである。それにもかかわらず、

翌朝の研究会では何事もなかったように研究発表をされるのだから、当時まだ30代前半だった私は「かなわない」と思ったものである。そうした裏話はさておき、この地理思想科研の研究会で私が学んだことの1つは海外の地理学、特にヨーロッパや北米の地理学史—新しいものも古いものも—の研究動向に触れることができたことである。当時、竹内先生がIGUの地理学史コミッションのチェアを務められていたことや、野澤先生も同コミッションのメンバーだったこともあり、地理思想科研ではIGU地理学史コミッションの動向が報告され、海外の研究者との交流の必要性を痛感させられたものである。この系譜は、その後に福田珠己氏(大阪府立大学)や島津俊之氏(和歌山大)、遠城明雄氏(九州大)らに受け継がれ、現在も続いているのは地理思想科研の大きな財産の1つだろう。

さて、そんな状況で1996年に「空間・社会・地理思想」が刊行されることになった。この雑誌の刊行の経緯は本誌今号で水内先生が書いておられるように、1995年12月の科研費基盤研究(A)「地理学における経済・社会理論と空間の思想」研究会において、当時の科研メンバーを中心にしてとりあえず科研費によって出版費がまかなえる3年間をめどに出してみようということでスタートしたものである。当時、私はまだこの科研の研究分担者とはなっていなかったが、それでも毎回の研究会にはお声をかけていただき、この雑誌の刊行にもかかわらせていただいたことは幸運であった。島津氏や遠城氏、荒山正彦氏(関西学院大)、丹羽弘一氏(前富山大)、大城直樹氏(明治大)などの同世代の地理学者たちもみな同様に参加させていただいていたように記憶している。

1995年12月の科研研究会でのことだったかどうかは覚えていないが(もしかしたら、ほかの私的な研究会だったかもしれない)、新しく発刊する雑誌をどうするか、ということについて検討したことがある。そのときに、確か同世代の研究者たち(どな

* 金沢大学人間科学系 教授

ただったかもう思い出せません)と一緒に、*Society & Space*誌の10周年記念特集号に掲載されたMichael DearとNigel Thriftの回顧記事(Unfinished Business: Ten Years of *Society and Space*, 1983-1992)を読んで議論したように覚えている。同記事によれば、1981年にオーストラリアのシドニーとキャンベラの間にあるベリマ(Berrima)という街にある小さなカフェで、ThriftやDearら5人の地理学者が集まり、新しい学術雑誌の発刊について相談したことが、*Society & Space*誌の始まりだったということである¹⁾。彼らはこの集まりを「ベリマ・サミット」と呼び、*Society & Space*誌の起点に位置付けている。私達も、日本の「ベリマ・サミット」を気取ったわけではないが、一連の研究会での議論の中で、新しい雑誌の発刊を通じて日本の地理学界に一石を投じたいという思いを共有していたように思う。

今、手元にある1995年12月の科研研究会で配布された水内先生の手書きメモ(1995年12月10日の記載あり)によれば、雑誌タイトルについては「空間と社会」、「ゲオクリティック」、「空間・社会・思想」、「*Journal of Space, Society, and Geographical Thought*」などが上がっている。私達(当時の)若手世代の間でも、例えば「クリティカル・スペース」、「Geo Critique」などのタイトルがあがったが、いずれも日本国内や海外に同名もしくは類似の雑誌があるということで却下となった。最終的にどのような経緯で「空間・社会・地理思想」というタイトルになったのか、当時の科研関係者にもいろいろ聞いてみたが、はっきりしない。しかし、いずれにしても水内先生が提案されたタイトルが元になったことは間違いないだろう。また、同じメモの中で、内容については速報性、話題性(トピック)、地理思想、見方・態度・アプローチなどの要点が挙げられており、地理学評論や人文地理などの学会誌とは異なる、問題提起的で理論志向の方向性が打ち出されていたように思われる。

現在の「空間・社会・地理思想」が当時の私達が期待したものとなっているかどうかはわからない。しかし、1996年の発刊から今年で26年。当初はとりあえず3年間の刊行を目指していたものが、ここまで継続するとは想像していなかった。せつかくここまで続いたのならば、今後とも継続してほしいというのが率直な気持ちである。発刊当時は若手だった私たちの世代も、すでに還暦を迎えようとする年齢となった。そこで最後に、過去の経緯を述べるだけでなく、今後の「空間・社会・地理思想」のあり方について、思うところを記してみたい。「空間・社会・

地理思想」は、上記のように主に地理思想科研や社会地理学科研のメンバーとその関係者を中心にしてこれまでさまざまな論文を寄稿してきた。なかには、直接的に科研メンバーとは関係なくても、メンバーの紹介や推薦で寄稿された方もいるが、それほど多くはないだろう。個人的には投稿規定などを整備して、もう少しオープンな形にして、より広く投稿者を募ることができないかと思っている。もちろん、ファンド的なことも重要で、これまではなんとか科研費をつないで刊行の費用をまかなってきたが、科研費の獲得競争がますます熾烈になってきた昨今の状況では、こうしたやり方もいつまでもつのか心配である。個人的には紙媒体の学術雑誌に愛着を感じる方だが、電子ジャーナルなどの経費的に持続可能な方法も考えた方がいいかもしれない。

その場合に1つ参考にできると思われるのは、例えば、英語圏で刊行されている電子ジャーナルの*ACME: An International Journal for Critical Geographies*(以下、ACMEと記す)である。同誌は批判地理学をベースとして広く人文社会科学全般における空間や場所に関する批判的研究をカバーする査読付きの学術雑誌だが、学会誌のような会員制・会費制を取らず、また商業出版にも与しない完全無料(オープンアクセス)の電子ジャーナルである²⁾。編集委員および査読者はすべてボランティアであり、投稿料も必要としない。しかし、ACMEが最も特徴的なのは、同誌が明確に新自由主義的な学術雑誌評価制度への参入を拒否している点である。昨今、日本の大学の教員人事でもインパクト・ファクターやジャーナル・ランキングが高い学術雑誌に何本論文を発表したのかが重視されるようになってきているが、ACMEはこうした競争原理に基づく学術雑誌評価制度のあり方をアカデミズムに対する新自由主義的な介入ととらえ、明確に拒否しているのである。ACMEのホームページによれば、これまで幾度かACMEに対してこれらの学術雑誌評価制度への参加の打診があったが、すべて拒否したそうである。そのような学術雑誌評価制度に頼らずとも、投稿者や編集者、査読者の高い意識と研究能力によってACMEの研究水準は保たれるという自負の表れでもあると思われる。実際、ACMEに掲載された論文はいずれも厳しい査読(3人の査読者!)を経たもので、しかも鋭い問題提起や斬新な視点による論文が数多く見られる。

「空間・社会・地理思想」において、いきなりACMEのような体系的な編集体制を整えることは難しいだろう。英語圏のみならずフランス語圏、スベ

イン語圏など世界中から30人もの編集委員を集め、さらに75人もの国際アドバイザー・ボードを擁するACMEと比べれば、「空間・社会・地理思想」はまだまだ小さな研究者サークルを形成しているに過ぎない。しかし、今後の持続的な運営を考えていく上では上記のようなACMEのあり方は参考になると思われる。もしも許されるならば、還暦を過ぎてももう少しだけ夢を追い続けたいものである。

注

- 1) Dear, M. and Thrift, N. J. 1992. Unfinished Business: Ten Years of Society and Space, 1983–1992. *Environment and Planning D: Society and Space* 10: 715-719.
- 2) ACME は、カナダ政府社会・人文科学研究会議 (Social Sciences and Humanities Research Council : SSHRC) の資金援助を受けている。